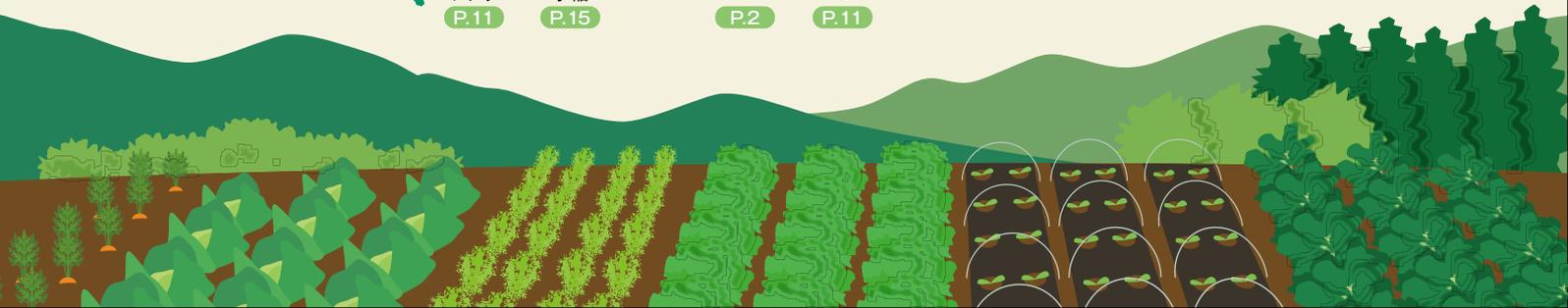


紹介する新規就農者の地域と品目





Uターン 新規作目

はしもと あきひろ
野菜農家 橋本 彰宏さん(赤磐市)

就農：平成26年 経営面積：水稲6ha、野菜2ha

サラリーマンから兼業農家だった親の田んぼを受け継いだ橋本彰宏さんは、最初は「抵抗のあった」農業で自身の夢である「起業」に挑戦。農業の経営を通して地域とのつながりのありがたさに改めて気づき、担い手としての自覚にも芽生えた。

実家が兼業農家だった橋本さんにとって、稲刈りの時期には家族で田んぼを手伝うなど、農業は子どもの頃から身近な存在でした。当然のようにあとを継ぎ農家になったのかと思いきや、「農業をしたいとは思ってなくて、田んぼを継ぐのも嫌だった」と意外な答え。そんな橋本さんが農業を継ぎ、規模を拡大しているのにはあるきっかけがありました。

実家のある赤磐市ではなく岡山市内でサラリーマンをしていた橋本さんは「自分で何かをしたい」と起業のチャンスを伺っていました。そんなとき同僚に大規模経営の農家を紹介されます。農業で起業という選択肢をまったく考えていなかった橋本さんでしたが「倉庫や機械の設備など、一般的な農家とは比べものになりませんでした」とその規模に衝撃を受け、農業経営の可能性を感じつつ、あることに気がきます。「農業であれば家の田んぼもあるし、地縁もある。起業する原資になるんじゃないか」。決して継ぐまいと思っていた農業でしたが、それが「起業」という自分の夢を叶えるためのもっとも身近で大きな資源だった事に気がきます。

農業での起業を決意し会社を退職。実家の1haの田畑を基盤に事業の拡大に取り組みはじめた橋本さん。「農業はもうからないといわれるから、自分で考えて行動をしないとダメだと思った」と持ち前の起業家精神で挑みます。

「稲作は面積をこなさないとお金にならないので、はじめから野菜をつくりはじめました」。初年度は、設備投資が少なく小面積でも収入が見込めるオクラ、ほうれん草、小松菜に挑戦。インターネットや農業普及指導センターからの資料を参考に生産したところ「オクラはうまく収穫できたけれど、ほうれん草、小松菜はいまいち」。やはりそう簡単にはいきませんでした。販路についてもインターネットで調べたり、直売所に出したり、手探りでの経営が続きます。

「資金も大変でした」と橋本さん。大規模経営を目指すものの運転資金の捻出のため夜はアルバイトに追われる日々。設備投資に資金を回す余裕はありませんでした。

そんな中、父親の知人の大規模経営の農家に「うちに来れば勉強にもなるし、収入にもなる」と声をかけてもらいアルバイトをすることになります。おかげで夜のアルバイトを辞め農業に専念できるようになりました。「ものすごく助けていただきました」と橋本さん。もうからないと言

われる農業に疑問を持ち、独学で挑戦した橋本さんでしたが、助けてくれたのは地縁の地元の農家でした。

地縁に恵まれた橋本さんが現在営むのは、実家の水田1haに加え、水田5haと畑2ha。順調に規模を拡大し、米、オクラ、キャベツ、ほうれん草を生産しています。

「最初は農地をなかなか貸してもらえなかったけれど、今は地主さんから声をかけてもらえるようになりました」。ひたむきに農業に打ち込む姿が地域に認められ、期待を寄せられています。

橋本さんに就農して一番うれしかったことをたずねると「地域の人に感謝されるのが本当にうれしい」と迷わず笑顔で答えが返ってきました。高齢化による農業の担い手不足の中、維持の難くなった田畑も多く、それを引き継いでくれる橋本さんの存在は地域にとってありがたい存在なのです。

「最初は地域のためにという気持ちはあまりありませんでした。けれど、いまは自分がこの地域の農地を守っていきたくて思っています」と橋本さんの自覚も十分です。

今後は、友人を加えてさらに拡大を目指すという橋本さん。畜産農家との飼料と堆肥の地域循環や他地域の同世代の農業経営者との交流など、やりたいこと、アイデアは山積みのように、「家族はまだやるの?と心配そうですけど…」と笑う若手農業経営者の挑戦はまだまだ止まりそうにありません。

※本文中の内容はインタビュー当時(平成29年)のものです。





新規就農研修 移住

たか お ひでかつ
 スイートピー農家 高尾 英克さん(倉敷市)

就農：平成20年 経営面積：20a

エンジニア、デザイナーとして働いていた高尾英克さんは、身体を壊したことをきっかけに就農を決意。徹底的にリサーチし、効率的に収入を得られるスイートピー農家に転身しました。理系出身者ならではのユニークな視点から産地・倉敷でのスイートピー栽培についてお話を伺いました。

エンジニア、デザイナーとして働いていた高尾さんが農業に興味をもちはじめたきっかけは、パソコン仕事がたたリ目を悪くしてしまったことでした。「長く続けられる仕事をしたいと思いました」と高尾さんが言うように、農業は80歳で現役の人もたくさんいる。仕事で体調を崩してしまった高尾さんは、自然とふれあい長く続けられる農業を仕事にするため、就農について調べはじめます。

「食えないといけない」と思った高尾さんは、稼げる作物を徹底的に調べます。都道府県が公開している作物ごとのデータを調べた結果、高尾さんが選んだのは、作付面積に対する収入がよく、初期費用も少なく済むスイートピー。しっかりとリサーチと計画は、就農への不安を少なくし、その後の農業経営にも大きく影響します。

市町村単位で比較すると、倉敷は全国3位のスイートピーの産地。宮崎など九州にも産地があるが、災害が少なく温暖な瀬戸内海式気候で、冬の間の日照が多い倉敷市船穂町を就農地として選んだ高尾さんは、岡山県の新規就農研修制度を利用して研修を受けました。

「1年目は船穂町のスイートピー農家さんのもとの技術を学び、2年目は研修は場で全ての作業を自分でしました。しっかりと技術も学べる手厚い制度でした」。2年間の研修の間に技術だけではなく地域のひととの信頼関係も築き、研修終了後に自分が経営する農地も探すことができました。

さらに、産地である船穂町には、気候や研修制度のほか販売についても大きなメリットがあります。できたスイートピーはJAを通して全量を市場出荷し、産地ブランドとして販売されます。そのため生産者は販路については心配せずに、栽培に集中することができます。新規就農者の受け入れから研修、販売まで産地である船穂町では、スイートピー生産を一貫してサポートする体制ができています。

そんな産地ならではの手厚いサポート受け、いよいよ就農を迎えた高尾さんですが、いきなり苦境に立たされます。最初の年は花が半分しか咲かなかったのです。「もともと山を崩した土地で農地ではなかったため、土に癖がありうまく咲きませんでした」

綿密なリサーチと手厚い支援制度で、万全の体制で臨んだかに思えた就農初年度でしたが、自然相手は簡単にはいきませんでした。

「でも、それがあったから右肩上がりで成長できた」という高尾さん。前向きな気持ちで、自分の得意な知識を活かし、肥料成分を科学的に細かく計算。必要な肥料分を液肥として直接供給する栽培に取り組み、

土の問題を徐々に解決し、2年目以降は収穫量を順調に伸ばしていききました。

初年度は不作でありつつも、順調に生産を続ける高尾さん、スイートピー栽培は自分にあっていたといいます。農業も工業も一定の品質のものをたくさん作るのが求められるのは同じ、ハウスで栽培するスイートピーは、施設のメンテナンスや機材の修理も含めて実は工業的。肥料も科学的に検証できるので、これまでのキャリアがとても生きています。

「農業と工業で何が違うかと言えば、農業は社員のひとりが光とか風だったり、来るか来ないかもわからない気まぐれな社員ってことなんじゃないかと思います」と高尾さんは笑います。その気まぐれな社員との付き合い方は、先輩農家の方が教えてくれました。

初年度にうまく花が咲かず落ち込んでいた高尾さんは、「できることを全部やって、それでうまくできなかったら仕方がない。自然相手なんだからなるようにしかならないよ」と言われ、それからは多少不作であっても「なんとかなる」と思えるようになったといいます。

就農する上で、リサーチや計画はとても大切です。けれど、それだけですべてがうまくいくわけではありません。しっかりと技術を身につけ努力する。それでも相手は自然。やり切ってもうまくいかないときは、大らかな気持ちで受け止めることが、農業を長く営む秘訣なのかもしれません。

※本文中の内容はインタビュー当時（平成29年）のものです。

※写真はイメージです





新規就農研修 Uターン

桃農家 ^{みに}三谷 ^{なおし}直司さん(総社市)

就農：平成27年 経営面積：1ha

総社市で桃農家を営む三谷直司さんは岡山県真庭市出身ですが、大学進学とともに九州へ引越し、就職や結婚も長崎県。しかし「農業をやりたい」という夢を叶えるため一念発起して岡山県へ平成24年にUターン。未経験から農家として独り立ちを果たした物語には、就農するための大切なヒントがありました。

もともと農業に興味があった三谷さん。30歳半ばに差し掛かるあたりから興味から本気の夢へとシフト。しかしサラリーマンとして長年勤めていた三谷さんは、夢を膨らませながらも「農家で食べていくことは難しいのだろう」というイメージがあったといいます。

そんなとき、偶然、岡山県のホームページで就農オリエンテーション(産地見学会)の募集を見つけて参加。その場で農家の方たちと交流したことで、漠然とした不安が解消されたといいます。

「私自身、果物が好きで農家になるならば果樹農家がいいなあと思い、桃やブドウが有名な岡山県で農業をやろうと思いました」。そして三谷さんは桃を選びます。「農家の方に色々お話を伺って、桃のほうが初期投資を低く抑えられることがわかってそこが決め手になりました」

資金を借りてまで、という踏ん切りはつかなかった、と三谷さんは言います。「農家をやりたい」という夢と「家族を養う」という現実の間で、実現可能な道を模索します。

長らく暮らした長崎県での就農も考えましたが、自らの出身地である岡山県での就農を決意した三谷さん。その理由は「積極性」だったそう。

「就農に関するオリエンテーションをはじめ、活発に新規就農者を受け入れている印象を受けました。また私自身が岡山県出身なので、親戚や家族も居て、困ったときに手助けもしてくれることは大きかったと思います」手厚い就農支援と地縁の後押しによって、三谷さんは自らの夢を叶えるため、生まれ故郷へUターンを果たしたのです。

就農するにあたり、長崎県から岡山県へ、妻と子ども2人と移住した三谷さん。がらりと環境が変わって戸惑うことが多いかと思いきや、生活環境は前に住んでいたところと変わらなかったそう。

「むしろ総社市は利便性が高い」と三谷さん。総社市は美しい自然が残っているながら、都市部へのアクセスも近い「ちょうどいい田舎」

不慣れな土地では暮らすだけでしんどい思いをして、農業どころではなくなるパターンも多いそうだが、三谷さんはすんなりとこの土地の暮らしに馴染めたようです。

就農地を総社市に決めたのは、就農希望者を受け入れ、農業技術を指導する受入指導農家との出会いが大きいと三谷さん。受入指導農家自身も新規就農をするために兵庫県から総社市に移住した先輩でした。

「研修は一言でいえば、楽しかった。自分の知らなかったことを教えてもらって。自分一人でやっていくための作業を覚えていくのですが、最初は本当に桃の実ができるのだからってことが不安でした」

苦労したことを伺うと「大変なことはなかった」と三谷さん。

「最初に予想していた農業の厳しさのラインを高く設定していたからかもしれないです。職人気質な作業が多く、さらに感覚的なものも必要な場面もあります。そういうところに憧れていた部分もありました」

元々すぐくやりかかったことは、実際にやってみても理想通りの仕事。やるべきことが自分の気持ちに合った。それはとても幸せなことです。

研修中に学んだことで、印象に残ったことは「生産性」と「効率性」だといいます。

「桃をつくる時、どうやったら良いものをつくれるか、ということを普通、メインに考えますが、農業で大切なのはそれだけじゃないってこと知りました」

いかに素早く、効率よく、数をこなすか。数を出さなければ、収入にならない。しっかり出荷できる桃をつくる生産技術、出荷技術、スピードを教わったといいます。

「盲点というか、そこが大事だと自分で気づけていなかったので、考えながら作物をつくるのが大事なんですね」

そこをこだわるのが農家で食べていくということ。趣味の農業と一線を画するところでした。

2年間の研修を経て、三谷さんは平成27年に独立を果たします。総社市に自分の桃畑を持ち、現在1ヘクタールの規模で栽培を行っています。農地は受入指導農家の方や研修の受入主体の農業公社が紹介してくれたもの。三谷さんだからこそ集まった農地だと、地域のひとは口を揃えます。三谷さんの姿を2年間見守ってきた人々の、彼にこの産地を担ってほしいという期待がうかがえます。

地域に根を張り、おいしい桃をつくる三谷さんに、今後の展望を伺うと「仲間を増やしたい。若い人を増やしたい」と即答。「みんなでたくさん桃をつかって、産地を盛りあげていきたいです」

総社は現在、20代~40代の若き農業者が10人以上いるそう。高齢化が叫ばれる第一次産業とは思えないほど若手が増えています。「新規就農」というチャンスによって総社の桃づくりは次世代につながる持続可能な産業に。三谷さんも「良いものをつくりたい。良い価値で売りたい」というストイックな桃づくりで、一大産地を担う人材になりつつあるようです。

※本文中の内容はインタビュー当時(平成29年)のものです。





法人から独立 新規参入

有機人参農家 駒井 裕子さん・篤さん(井原市)

就農：平成25年 経営面積：60a

井原市美星町の山に囲まれた谷あいの小さな畑で、有機人参を栽培する駒井さんご夫妻。「高校生の頃から農家になろうと決めていた」という裕子さんは、その言葉通り、若くして農業を学び、平成25年に独立。息子さんにも恵まれ、家族で土と触れ合っている、今どき珍しい?芯の通った若い女性の就農ストーリーです。

井原市美星町で生まれ育った裕子さんは、高校生の頃に「農業をやるう」と決めたといいいます。「両親は非農家だったのですが、将来は農業で食べていけるようになりたいと思っていました。子どものころから植物を育てることが好きだったので、なんとなく、農業がいいなあって」

高校生の頃からやりたいことがはっきりとしているだけでもすごいです。高校卒業後、裕子さんはアメリカ・カリフォルニアに渡ります。「海外で農業を学びたかった」と裕子さん。

そして、留学先の大学で、オーガニック文化と出会います。

「平成16年～18年半ばまで留学していました。その頃はまだ今のように日本では「有機栽培」が一般的ではなくて、私もアメリカというと大規模農業をイメージしていたんですけど、少量で有機栽培をするというやり方があるんだと知りました」

これを契機に、裕子さんは有機農産物の栽培農家を志すことになりました。

帰国後は「たまたま実家の近くにあった」という全国的にも珍しい有機人参を栽培する農業法人に就職。そこで、有機人参の栽培技術を学びます。ちなみに旦那さんの篤さんともこの会社で出会いゴールインしました。「農業をしたい」という夢を叶え、パートナーも得た裕子さんですが、叶えたい夢がもう一つありました。独立して農家になることです。

そのために一番の問題だったのが農地の確保。裕子さんは地元の強みを活かして農地を探します。「どこどこの畑が空いたら借りたいので教えてください」と市役所や集落の人にお願ひしたり、農地を借りるのは地元でも大変です。

農業法人に勤めながらの農地探し、その甲斐あって今の農地を無事借りることができました。家は農地を借りてから1年かけて、農地から車で5分くらいところに借りることができ、ようやく子育てと家事、畑仕事に最適な環境が整いました。

栽培しているのは農業法人で学んだ人参。「栽培技術は農業法人で学んだので、不安はありませんでした」と二人とも口を揃えます。やはり就農前に確かな技術を身につけることは、気持的にも大きな影響があるようです。

個人宅配のイメージもある有機野菜ですが、駒井さんは地元の青空市での販売が半分くらい。その他ジュース用人参の販売や卸の会社などに販売しています。「個人宅配だと出荷の手間が大変ですが、まとめ

て販売できるので手間がかからず畑仕事に集中できます」とのこと。駒井さんの人参は、ジュースなどの需要が大変高く「つくった分だけ売れる」そうです。

つくった分だけ売れてしまうという人気の人参。今後の展望を伺いました。

「うちの栽培方法は連作障害を避けるために農地を休ませつつ栽培しているので、農地の確保が必要になります」と篤さん。つくった分だけ売れるけれど、効率よく大量生産とはいかないようです。

最後に、農業をやっていて一番うれしいことはなんですか?と伺うと「おいしかったよってもらったときです」と裕子さん。「地元の産直で販売しているので、うちの人参を選んで買ってくれる人もいて、声をかけてくれるんです」とのこと。

農業をする上で、地域とのつながりが大切です。

直接お客さんと接することもあれば、青空市の集まりや自治会、消防団など農村にはいろいろなつながりがあります。

「挨拶は大事ですね」と篤さん。「僕たちは農業者であると同時に地域での生活者でもあります。野菜づくりも、くらしも、子育ても、地域とのつながりの中で成り立っています」

篤さんの言葉のとおり、地域に根をはって野菜をつくり、子どもを育て、自分たちらしく日々を楽しむ駒井夫妻から、井原市美星町のくらしの豊かさが感じられました。

※本文中の内容はインタビュー当時(平成29年)のものです。





新規就農研修 移住

トマト農家 **與田 十也**さん(高梁市)

就農：平成29年 経営面積：18a

岡山県倉敷市の児島でジーンズの染織をしていた與田十也さん。経営者になりたいと就農を目指し、現地見学会で訪れた高梁市備中町平川の環境と人に惹かれ移住、トマト農家に。今では「集落の金の卵」として、地域の担い手として期待されています。

小さいころはあまり農業に縁がなかった與田さん。地元の岡山県倉敷市児島の産業でもある繊維業に携わり、ジーンズの染織職人として6年間働きました。そんな與田さんが農家を目指したのは、実家が自営業だった影響から、勤め人としてではなく自分もいつかは経営者になろうという思いが強かったそうです。

「ソフトな仕事より、ハードな仕事」「身体を動かすのが好き」ということから自然と農業に興味を持ち、就農に関するセミナーや相談会に参加したのが26歳の頃でした。

就農地には特にこだわりはなかったが、インターネット等で全国各地の状況を調べた結果、災害もなく天候も良い岡山の環境の良さにあらためて気付き、岡山県を就農地と決め、岡山県が主催する就農希望者向けの現地見学会に参加。その中で出会ったのが今暮らす、高梁市備中町平川でした。「感じる雰囲気よかった」という言うように、はじめて訪れたときに直感で、この場所を気に入りました。

備中町平川は人口約400人の小さな集落。

農業をするにはより条件のよい地域があったかもしれないし、小さい子どもが少ないことで子育て環境も心配でしたが、「地域の人のくらしを楽しみたかった」と與田さんはこの場所で暮らすことを決めました。

移住と就農を全面的にサポートしてくれたのは、集落の移住定住を推進する地元団体「平川村定住推進協議会」。同協議会が主催する「体感田舎暮らし」というプログラムに参加し、児島から1年間通いながら地域との関係を深めていきます。

1年間はすこし長い気はしますが、よそ者が少ない地域で、移住者、地域住民の双方が互いを知り受け入れるのには、この時間が必要なのだと同協議会の江草さんは言います。

この間にトマト農家である江草さんのもとでトマトづくりを体験してもらい、農業、トマトづくりは自分に向いていると感じたという與田さん、「移住して就農してから、やっぱり農業やトマトづくりに向いていないとなるとまたゼロからやり直し、その前にちゃんと体験することは大切」と話してくれました。

同じ集落で暮らす「家族」になるかもしれないからこそ、安易に受け入れず、集落のいいところも悪いところも体験してもらい、住民とも接してもらおう。その上で納得して来てもらい、この集落で根を張り、農家と

しても成功して欲しい。そんな真摯な集落の思いも與田さんを強く後押ししました。

その後は、新規就農研修を約1年半受け、平成29年に就農。今では地域にすっかり溶け込んだ與田さん。江草さんの指導もあり、就農1年目から順調に収穫をすることができ「毎日を楽しめた」と充実の1年を過ごします。

そんな與田さんに農業の魅力を聞くと「自分たちのつくったものが直接収入になるから、自分たちの成長を実感できること」とのこと。自分の栽培技術が上がり、トマトの品質と収穫量が上がれば収入も増える。それを身をもって体験できることが仕事のモチベーションになります。

やる気あふれる與田さん、2年目に向けて新しい農地を借りることもできました。

それはやはり地域にしっかり溶け込んでいる信頼感から。江草さんも耕作放棄地になる前にと、持ち主を説得して與田さんに畑を譲ってもらうなど、集落の将来を考え、與田さんを支援します。

就農にもいろいろな形があり、その多くは「職業の選択」なのだと思います。けれど、與田さんのケースは、「職業の選択」だけでなく、地域とともに歩み、地域の一員になるための道のりだったかのよう。與田さんの備中町平川での農業ははじまったばかりです。これからいろいろな苦労があることでしょう。けれど、そんな苦労も地域の方と助け合いながら乗り切っていくはず。

※本文中の内容はインタビュー当時(平成29年)のものです。





新規就農研修

移住

なかにし ひろむ

ブドウ農家 中西 啓さん(津山市)

就農：平成24年 経営面積：130a(野菜も含む)

津山市でブドウを栽培する中西啓さんは元・航海士と珍しい経歴の持ち主。船から降りて、地に足をつける仕事を旨とした中西さん、「自然と向き合う仕事」という意味では航海士も農業も同じだったといいます。しかしまったく異なる異業種へ飛び込んだ物語には、岡山だからこそできた逸話が満載です。

中西さんは大阪で生まれ育ち、船乗りを志して東京商船大学(現・東京海洋大学)で学び航海士になった異色の経歴の持ち主。卒業後は石油関連会社の航海士として、主な仕事はシンガポール沖のマラッカ海峡を通って中東方面へ航海すること。一往復50日以上かかる大航海を11年間続けていました。年間のほとんどが海上での生活で、まさに「地に足のついてない」仕事だったといいます。

「ほとんど日本にいない生活で、年がら年中船の上。休暇も一番忙しいときで日本に2週間しかいないときもありました。それ以外は船上か外国か、そんな生活に疲れてしまいました」と中西さんは当時を振り返ります。航海士になって10年過ぎた頃、違う生きかたを模索しはじめました。

中西さんの中では漠然と、今まで海と向き合ってきたように自然と向き合う現場で立ち回る仕事がしたい。その中の選択肢として「農業」が浮かび上がってきました。

父が仕事の関係で倉敷に住んでいたこともあり、中西さん自身が休暇で倉敷を訪れ、岡山県内で農業ができる場所を探しはじめます。「次の仕事を模索していくなかで、休んで岡山を訪れた際、友人が岡山県内のブドウ園を回るバスツアーに参加してみたら?とすすめてくれて、行ってみました」

そのツアーで、中西さんは津山市の田中農園の社長さんと出会います。「津山市の田中農園の社長さんと話をして、農業って面白そうだなと感じたのが一歩を踏み出すきっかけになったと思います」と中西さん。「まず、すごく羽振りが良さそうだった(笑)。農業で食べていけるのかなと思えたのが大きいです」

主に栽培する品目にブドウを選んだのは、ブドウが一番いいイメージがあったから、と中西さん。新規就農者でもやっていけそうだという目論見がありました。農業は趣味ではなく仕事です。生活のことを考えることも大切です。

ブドウの産地としてはあまり大きくない現在の土地に移住・就農を決めたのは、師匠となる田中農園さんがいたからだといいます。「やはり“人”が大事ですよ。他の土地や有名なブドウの産地も見回りましたがここが一番楽しそうな印象でした。田中農園はブドウが中心ではありませんが、農業経営や機械の扱い方など、農業の基礎を学びたいと思いました」

こうして平成22年4月から、就農を目指し研修に入った中西さん。「農業の「楽しさ」を田中農園で学びました。師匠に学んで一番心に残ったことは、ひととの繋がりがないと農業は絶対にやっていけないと

いうこと。自分の時間を割いてでも、ひととの繋がりを大事にしないといわれました」

研修を1年ほどで終え、独立に向けての準備をはじめた中西さん。もともと貯金していた分とブドウ棚を立てる資金を借り入れて就農したといいます。「ブドウの場合は、できるまでに時間がかかるので、初収穫を待つ間の生活費が一番大きい。ブドウの樹を一からつくる場合、4年間は収入は見込めません。僕は師匠が野菜中心の農家だったので、ブドウと並行して野菜もつくっています」と新規就農のハードルを包み隠すことなく話してくださいました。

急いで就農したのは早く自分で始めたかったのと、農地確保のタイミングがあったからだといいます。「最初の畑は指導機関の方の紹介でつけました。その他の畑は、貸してくださるひとを探して見つけました。よそ者の僕は、土地をお借りしないとここで農業ができません。師匠に習ったつながりのなかで良い方々からお借りすることができました。今は地主さん4人から各々借りています」

ここに就農して一番よかったことは農業が「楽しい」こと。そして農業のどこに楽しさを感じているのかと伺うと、即座に「自由」と中西さん。「自分で色々決められることがいいです。自営業ですからね。自分の予定を自分で決められるのが嬉しいです」

暮らして仕事が密接に関わる農業だからこそ、農家が快適に暮らす場所も重要です。

「研修中は津山市街のアパートに住んで畑に通っていました。就農するにあたって、畑の近くに物件を探す際、人づてに物件とつなげてもらいました。周りのひとにそれとなく「家を探しています。買います」と伝えると「あるよ」と言ってくれるんです」と中西さん。

津山に来て新しい家族も増えた中西さん。海から陸にあがった航海士は、今日もひととひとのつながりを大切にしながら、今日も、地に足をつけて、ものづくりに

励んでいます。
※本文中の内容はインタビュー
当時(平成29年)のものです。





法人から独立

なが や りゅういち
花壇苗農家 永谷 竜一さん(美作市)

就農：平成27年 経営面積：30a

平成27年4月に花壇苗(花の苗)農家として新規就農した永谷竜一さん。永谷さんは故郷・美作市で就農の夢を叶えた。大規模な農業法人が多い花壇苗農業界で、あえて個人農家を志した永谷さんに、厳しさとやりがいについてお話を伺いました。

永谷さんは、様々な仕事を経験したのち、25歳のとき、農家になろうと心機一転、農業を志します。

「はじめは花壇苗農家になるつもりはありませんでした。野菜でもお米でもよかったです。しかし、農家は「なりたい」と願ってもすぐに就職先があるわけではないし、目指せば即なれるものではないとわかっていました」永谷さんは、知人からの紹介で美作市大原の農業法人へ就職。この法人のメイン栽培が花壇苗だったため、花壇苗農家の基本を学びます。その過程で永谷さんに花壇苗農家の道が拓けていきます。

新規就農をするにあたって、やはり気になるのは「農地確保」と「自己資金」。農地は地元を歩き回って探し、元は水田だったこの場所にたどり着きます。

「地主さんも、僕の前にここで稲作をしていた農家さんも顔見知りだったので、比較的スムーズでした」と永谷さん。地の利を生かした縁でクリアしました。

自己資金はやはりネックとなり、永谷さんも運転資金と設備投資の資金を借入。少しでも経費を浮かせるために温室ハウスは自ら組み立てたそう。

「花を育てるのはすごく難しいです。花は「姿」じゃないですか。だから、「姿」が完璧なものが求められます。僕らのお客さんは、一般の方ではなく、プロのバイヤーさんです。求められるもののレベルが高いです」永谷さんは、就農後、一から販路をつくったといいます。主な販路は、市場の競りと直接取引のお店への卸し。オフシーズンには、関西の園芸店を回って、独自の販路を開拓するなど、若さとフットワークの軽さで花・苗農家としての可能性を広げています。

「園芸店に足を運んで、担当者顔と顔を合わせて、名前を覚えてもらって、購入してもらってスタイルです。そこでも感じるの、商品さえ良ければ、営業をしなくても売れるということ。狭い業界なので「ええ花つくる花壇苗だ」と広まれば、おのずと需要は増えます」

よいものをつくり、適正な価格で販売することが大切だという永谷さん。大手小売店を主な取引先になると、どうしても価格競争になります。そこは永谷さんの目指すところではありません。

個人の花壇苗農家は、量がつかれない分、質重視でなければ採算が取れません。だからこそ、永谷さんは「品質」にこだわり、情熱を注ぎます。ただつくりたいわけではなく、農業の成り立ちや商い、そして、コミュ

ニケーションを大切にしていることが伺えます。

花壇苗は、その見た目の美しさとは裏腹に、個人農家で食べていくことは難しい業界だといわれています。

「定番のものは未永くつくれるけれど、バカ売れはしません。流行りのものは、爆発的に売れますが、長続きしない。マーケットを見ながら、生産する品種はどんどん変わっていきます」

毎年変わる花のトレンドを先取る時代の読み、プロの厳しい目に晒される日々がそこにあります。永谷さんが栽培する主な花はガーデンシクラメン、パンジー、ピオラ、なでしこ、ポットカーネーション、金魚草などその数30品目以上。

新規就農者の数は片手で数えるほどしかない花壇苗業界ですが「まだやれることはあります」と永谷さんはいふ。「高齢化が進んでいるので新しい風を吹かせる存在としてやっていけると思っています。でも素人からいきなり新規就農は難しいので、技術は学んだほうがいい。好きな仕事を選んで、僕にはそれが合って、なおかつ、思ったよりも順調にここまでやっています。好きな仕事で飯が食えるんだったら、そんなええことはないじゃないですか。まあ、順調にさえいけばですが(笑)」

プライベートは、家族との時間が増えたという永谷さん。気候のいい時期は農作業に追われるが、花のオフシーズンである真夏や真冬は家族との時間が持るといいます。

「昨日も、夕方4時に子どもの習い事へ送りに行ったのですが、普通の会社員ではこんな時間に動くことは難しいと思うので、時間の融通が利くことは便利ですね」

厳しい世界での挑戦を続ける永谷さんですが、その笑顔からは充実した日々を送っていることが伺えます。

※本文中の内容はインタビュー当時(平成29年)のものです。





移住して就農。ハードルが高いように思える2つの大技を成し遂げた安藤さん。大阪府大東市で生まれ育ち、大学進学で愛知県へ移り住み、教師として赴任したのは東京都でした。体育教師としての仕事はやりがいもあり、楽しかった。けれど、定年まで、教師を続けていくイメージが描けなかったのが正直なところだという安藤さん。「自分で経営をしてみたかったです。どんな規模でも、経営者になりたかったんです」と当時を振り返ります。そして35歳で教師を退職します。

「なにもない状態で1ヶ月間悩み、与那国島など、点々と旅をしました。ひょんなことから岡山県のブドウ農家に流れ着きました(笑)」

たどり着いた先は、岡山県・勝央町。次の道を模索する中で、農林水産、第一次産業すべて考えたなか、農業がひらめいたといいます。その流れで、岡山県の就農相談会に参加します。そこで「新規就農研修」を知り、運命の出会いを果たします。

「後の師匠となる農家の方と勝央町で出会います。この方の人間性に衝撃を受けました。惚れたんですね。東京にいるときに感じる事ができなかったものを師匠から感じました。このひとが20年、30年続けている仕事を自分もやってみたいと思うようになりました」

安藤さんの師匠(受入指導農家)は勝央町屈指のブドウづくりの名手。技術的にもトップレベル、そして人間性も素晴らしい。「ひととして輝きたい」と願い、指標となるひとに出会い、安藤さんは、岡山での就農を決意します。

安藤さんは平成23年から1年間、新規就農研修を受け、就農します。「借りた農地は師匠の近くだから、やりながら技術も教えてもらうことができ、幸運でした」

しかし、就農してからが本当の試練だったといいます。就農時、借り入れはないものの、機械や設備に自己資金を投資して、資金はほぼゼロに。さらに就農1年目は前職の給料の1/10に落ち込みました。これが経営の世界なのかと洗礼を受けた安藤さん。農家はつくる技術だけではなく、売る方法も考えなければいけない。自分でつくったものを売る方法を確立することが、安藤さんにとって、本当の意味で「就農」でした。

「就農した1年目の収入の少なさにショックだったので、きれいごとだけ言っていられないと思いました。自分がつくったものを確実に売らないと」

現在、安藤農園ではピオーネとシャインマスカットなど5種類のブドウを栽培しています。

新規就農研修 移住

ブドウ農家 ^{あんどう}安藤 ^{よしとか}宜孝さん(勝央町/美作市)

就農：平成24年 経営面積：70a

勝央町ののどかな中山間地域にある「安藤農園」は、ブドウをメインに栽培する農園のほかに、ブドウを栽培する楽しさ・収穫が体験できる観光農園を営んでいます。安藤宜孝さんは、私立高校の保健体育教師から農家へ転身した異色の経歴の持ち主。どんな思いで岡山へやってきて就農したのか。そのストーリーをお届けします。

「ピオーネとシャインマスカットは、師匠と相談して、岡山のブドウ定番品種を育てようということになりました。技術面としてつくりやすく、単価も安定している。新規就農者にぴったりです。つくってみたい品種は他にもたくさんあります。」

経営と挑戦の試行錯誤を繰り返す今の働き方こそ、安藤さんの夢。

「全部楽しいです。おもしろいですよね。自分の思うがままに動ける、時間の制約もありません。収穫のときは追われますけれど、お金が入ってくると思うと頑張れる。しんどいことも結果につながる事がわかっているの、乗り越えられます」教師として働いていた頃と180度違う、「自分の判断」がすべての世界が農業なのです。

「考えることが多くて、工夫してみたらくっと収入があがったり落ちたり」と笑顔を見せます。最初は、たくさん実をつけて、たくさん売ればいいと、単純に考えていました。そうじゃなかった。いかにブドウを基本に忠実につくり、ブドウの価値をあげて1つあたりの単価をあげることが最終的な収入アップにつながります。近道はありません。でもそれがまた面白い。面白いしもどかしいし」

岡山県に移住後、2歳の男の子、0歳の女の子と子どもにも恵まれました。そんな安藤さんの将来の夢を伺うと「色々な果樹が収穫できる果樹園をやりたい。いつでもいろいろな果物が収穫できるって豊かですよ。それって楽園だなあって思います」。そう言って笑う安藤さんは、作り手と消費者をつなぐような農業を目指したいと目を輝かせていました。

※本文中の内容はインタビュー当時(平成29年)のものです。

